Costume and Textile

No.30 服飾文化学会会報 2015年9月

2015（平成27）年度　第16回服飾文化学会大会の報告

平成27年度第16回服飾文化学会大会・総会は、５月16日（土）・17日（日）の２日間にわたり、東京都千代田区にある大妻女子大学を会場に実施されました。

天候に恵まれ、正会員106名、非会員６名、学生会員４名、学生非会員19名の合計135名の方がご参加下さいました。以下はその報告です。

１．口頭発表、作品・ポスター展示発表

発表件数は、研究口頭発表16件、作品展示11件、ポスター展示１件、合わせて28件でした。

能澤慧子会長の開会の辞に続き、口頭発表が行われました。16日には８件、17日は８件の発表が行われ、持ち時間をこえる質疑の場面もあり、熱意のみられる発表でした。17日の口頭発表に次いで同会場にて、パワーポイントによる作品・ポスターのショートスピーチが行われました。今年で４回目を迎え、制作者の意図が一層理解しやすくなり好評でした。昼食をはさんで、作品・ポスター前で活発な質疑応答が行われました。

作品・ポスター展示

２．特別講演

深井晃子氏による講演「想像と創造―きもの／ジャポニスム／ファッション」は、口頭発表と同じ会場で、一般公開で行われました。

氏は服飾史家・服飾文化研究財団キュレーターとして、専門書の著作や、「モードのジャポニスム」など多くの展覧会の企画監修をされています。最近では、日本ファッションの30年を再読する「Future Beauty」展が2010－15年に世界各地を巡回し、高い評価を得ています。

講演会では、19世紀末に欧米に広がった日本文化への熱狂とそこから生まれた影響、描かれたきものやモードに受容されたきものについて述べられ、次いで、現代ファッションときものでは、若者たちに広がる新たなきものへの視線や近年のファッションにおける新たな展開について、お話頂きました。

19世紀末から現在までを網羅する豊富な図像資

特別講演

料とそれらを裏付ける文献資料が紹介され、いくつもの展開会を巡ったような充実感に満たされました。結びとして、きものの力についてお話を頂き、参加者へのたくさんのメッセージが込められた講演となりました。

欧米のきものへの視線について、何を取捨選択するかは文化の違いだと感じつつ、文化が交流することで新たなものが生まれるかもしれないと想像しました。興味は尽きることはなく、盛会のうちに終了しました。

３．博物館見学

２日目13時30分より、大妻女子大学博物館で開催中の「侯爵　鍋島家の服飾遺品の復元」の解説がありました。特別展の「大妻学校の原点―手芸―」では同大学創設以来の教材資料や所蔵品が展示され、復元された鍋島家の衣裳は、ジャポニスムを代表する小袖地を使用したバッスルドレスをはじめ、直大公と栄子夫人のペアの仮装舞踏服、横乗り婦人乗馬服の４点で、日本の洋装導入期の様々な服を網羅した貴重な資料といえます。

４．懇親会

16日の夕刻より大学内の食堂にて懇親会が開かれました。58名の参加があり、玉田真紀先生の司会、元会長、石井とめ子先生の乾杯の音頭で和やかな会となりました。

懇親会

５．その他

展示作品の記録写真の撮影は、カメラマンの末正氏により作品展示終了後、学内にて撮影が行われました。

開催校として、担当理事の先生方や学内の教職員・学生の皆様のご協力を頂き、無事に終えることができましたことを、深く感謝申し上げます。

（大会実行委員長　大網美代子）

第16回大会・総会プログラム

＜５月16日（土）＞

・開会挨拶　13：10～13：15

・口頭発表　13：15～15：15

❖　座長　塚田　耕一（杉野服飾大学）

A-1　日本におけるイタリア・ファッション受容の拡大―1980年代後期の男性スーツを中心に―
立命館大学大学院　古田　賢

A-2　明治～昭和時代前期における女子教育機関の刺繍見本
大妻女子大学　中川　麻子

A-3　明治期地方絹織物の糸質の変化の過程
日本工業大学（非）　大庭　光

❖　座長　長崎　巌（共立女子大学）

A-4　明治期の婦人雑誌にみる装い指南
―『女学雑誌』から―
滋賀短期大学　戸田賀志子

A-5　戦時体制下の京都染織品
―染織祭・女性時代衣装の活用を中心に―
龍谷大学　京都産業学センター
北野　裕子

A-6　帽子と戦後　日本婦人帽子協会の変遷
映像作家　○松本　力
テオの帽子アトリエ　松本由伎子

❖　座長　須藤　良子（女子美術大学）

A-7　19世紀のインド産モスリンとヨーロッパ産モスリン
―『The textile manufactures and the costumes of the people of India』より―
同志社女子大学　平光　睦子

A-8　ヴィンテージドレスにおける制作年代の考察
―Christian Dior のディドレス―
杉野服飾大学　○安部　智子　森　淳子

・特別講演　15：30～17：00
講演：「想像と創造―きもの/ジャポニスム/ファッション」
講師：深井　晃子　氏　服飾史家
・総　　会　17：10～17：40
・懇 親 会　17：50～19：30

＜５月17日（日）＞
・口頭発表　09：00～11：15
❖　座長　内村　理奈（日本女子大学）
B-1　ヴィクトリア朝イギリスにおけるテクノロジーの発達とショールの模様
―ペイズリー模様を中心として―
筑波大学大学院　長谷部寿女士
B-2　近代化に伴う民族衣装の意味変容
グアテマラ高地マヤ先住民の事例より
慶應義塾大学　本谷 裕子
B-3　ヴォーグからファッションドローイングが激減した理由
文化学園大学短期大学部　青山めぐみ
❖　座長　長田　美智子（鎌倉女子大学）
B-5　安全な衣服に寄与する再帰性反射材の配置効果の検討
池坊短期大学　杉田　慶子
❖　座長　玉田　真紀（尚絅学院大学）
B-6　ファッションにおける環境問題改善のための学部教育プログラムの提案
文化学園大学　砂長谷 由香
B-7　飾育への取り組みとその構築
―機能美に特化したユニバーサルファッションのデザイン・設計―
大妻女子大学　大網美代子
❖　座長　福田　博美（文化学園大学）
B-8　卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ
―伝統的な視点から―
共立女子大学　○田中　淑江　長谷川紗織
大塚絵美子　宮武　恵子
B-9　卒業式に見る袴の現代的着装の研究Ⅰ
―ファッションの視点から―
共立女子大学　○宮武　恵子　大塚絵美子
長谷川紗織　田中　淑江

・作品・ポスター展示　ショートスピーチ
11：15～12：27
❖　司会進行　深津　裕子（多摩美術大学）
C-1　高齢者のための食事用エプロンの検討
東京家政学院大学
○蒲池香津代　井澤　尚子
C-2　和服地のリブード
―ポジャギ手法を用いたデザインの試み―
東京家政学院大学　松本　幸子
C-3　平面から立体をつくる
帽子の場合：Ⅰ．ベレー
テオの帽子アトリエ　松本由伎子
C-4　可変性のある衣装　―内からの投影―
相模女子大学　○角田　千枝　門屋　博
C-5　芸術作品からの発想
―ジャコモ・バッラの作品から着想を得た衣服制作―
文化学園大学　梅田　悠希
C-6　システムパニエ―クリノリンへの応用型―
東京家政学院大学　富田　弘美
C-7　古着物を利用した日常服の制作
文化学園大学　高木　幸子
C-8　浴衣地を生かしたパンツスタイル
東京家政大学（非）　小田巻淑子
C-9　伝統的麻織物による室内着の提案
滋賀県立大学　○森下あおい
クリエーションA・R　中川　涼子
C-10　機能性に特化したユニバーサルファッションのデザイン・設計
大妻女子大学　大網美代子
C-11　繊維と金属線の融合Ⅵ　―馴染む―
女子美術大学　佐久間恭子
C-12　手仕事を通しての交流、海外の女性支援ワークショップ　―セルビア―
女子美術大学　佐久間恭子
・昼　　食　12：30～13：50
・大妻女子大学博物館見学（13：30より展示解説）
特別展　大妻学校の原点＜手芸＞
「侯爵　鍋島家の服飾遺品の復元」
・作品・ポスター展示
質疑応答　14：00～15：00

特集記事　侯爵鍋島家の服飾遺品調査・復元　―鹿鳴館時代―

石井とめ子（大妻女子大学名誉教授）

表題の調査・研究は、昭和54年から始まり、完了するまで、ほぼ７年の歳月を要した。

総桐製の大名長持には、「直大公御夫妻鹿鳴館時代御洋服」と記され、直大の仮装舞踏服・鬘・三角帽の一揃いの他、栄子夫人の白綸子地紗綾形唐団扇花束模様小袖夜会服、仮装舞踏服２着（サテン地薔薇刺繍アップリケ散らし夜会服、ブロケード地金モール刺繍アップリケ夜会服）、大礼服用トレーン・ヘッドドレス、篤志看護婦人会制服２着、看護服・看護帽、横鞍乗り婦人乗馬服（上衣・スカート・ズボン）、乗馬用ジャケット２着、ディドレス・帽子など約21点が鬱金（うこん）の風呂敷に収められていた。特に、江戸後期の打掛をドレスに転用した小袖夜会服の印象は、圧巻であった。しかし、ドレスの損傷が甚だしく、動かすだけで杢ビーズがばらばらと離脱し、意匠表現が失われ、修復は必須の条件になった。

本調査は、日本風俗史学会理事（当時）のN女史と修復を担当するN氏とで当った。

修復の条件は、和紙を裏から当て、欠損部分があっても補正せず現状維持であった。しかし、N氏の完成時の修復は、自己解釈の修復で、およそ欠落箇所の原形を甚だしく逸脱していた。

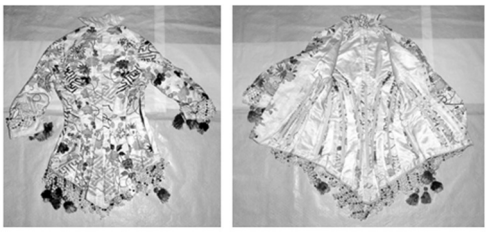
以上の結果から、鍋島報效会より大妻女子大学へ再修復の依頼があり、私の研究室で再修復をはかることになった。原形に直接手を加えるのは危険を伴うので、試作（復元）を経た後に、再修復をするという条件でお引き受けした次第である。特に、杢ビーズ飾り、房飾り、金房飾りなど手作業は、気の遠くなるほど緻密な細工を要した。文字数の制約から、全容を述べることは無理なため、小袖夜会服に焦点を絞る。（詳細は、学会誌、紀要を参照されたい）

●杢ビーズ飾りの木地は、原形と同形のものを別注し、それを巻くかま糸は７色（白・紫・赤・赤紫・緑・黒・金）。木地を隠すよう、かま糸３本束ねて１個に13～15回巻く。色糸と金糸では、本数、長さ、巻く回数も異なる。巻きあげた杢ビーズは、白2940個、色糸804個、総数3744個。

●色房飾りは、色糸7色（杢ビーズと同色）。色房１個の本数は、金糸24本、ほぐした穴糸210本、かま糸100本、計358本。総数178 個。

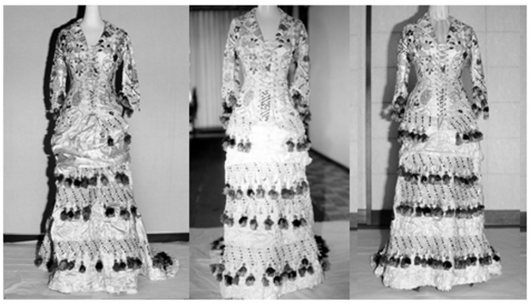
●金房飾り１個には、金糸120本、総数175個。いずれも手作りの図解や器具を考案して完了させることができた。幸運にも手の筋の良い助手、ゼミ生27名の協力の賜物である。

以下、原形、N氏の修復、再修復の写真参照。



上衣（原形）

写真１　上衣



原形　N氏修復　再修復

写真２　修復（前）

原形　N氏修復　再修復

写真３　修復（後）

特集記事　展覧会「紅板締―庶民の生活を彩った染織―」

清水久美子（同志社女子大学名誉教授）

平成27年４月24日～７月12日まで京都文化博物館において開催された展覧会「紅板締(べにいたじめ)－庶民の生活を彩った染織－」では、京都府立総合資料館所蔵（京都文化博物館管理）の貴重な資料約60点が展示・公開された。

展示品は、京都で最後まで紅板締を行っていた高野家（屋号紅宇）に伝来した道具類、そして大半が野上俊子氏（光華女子短期大学名誉教授）により蒐集・保存され、平成25年に京都府に寄贈されたものである。

京の紅板締とは、板締染の一種で、奈良時代に中国から伝わった「夾纈」とその系譜を一にする。江戸時代の享保年間以降、本紅を用いた板締染の華やかさと情感あふれる文様の美しさが庶民の「染」として愛好され、女性の襦袢や下着、子供の着物に多用された。特に江戸後期から明治期にかけて盛んに行なわれたが、時代の流れとともに、昭和初期には生産されなくなり、現在は「幻の染」となり、姿を消してしまった。

今回の展示で最初に目にとまったのは、写真１の「締枠」（江戸時代後期～明治時代）で、紅板締のための型板（朴）と枠（樫）と上部からおさえる板（桜）からなる。文様を陽刻（凸型）した型板（版木）に、生絹や縮緬などの生地を挟んで上部の楔で締めて固定するものである。

締枠を大きな桶の中に入れ、型板に掘った溝に紅染液が充分流れて行き渡るように、締枠を回転させたり揺り動かしたりしながら、染液を柄杓で万遍なく注ぎかけ、それを何度も繰り返して染めたという。

写真１　締枠（高野家伝来）

写真２の「雪輪竹文様下着」（明治時代）は、もとは二枚重ねの着物の下着と考えられ、鼠地の下着の胴抜き部分に紅板締が用いられている。防染された白い竹文様が紅地に際立って美しい。紅板締は、両面染で対称図形の連続模様を染め出すが、型板の側面に防染できない帯状部分が表われる。

写真２　雪輪竹文様下着（野上俊子氏寄贈）

女性用下着の他には、小袖や裂地、子供用振袖なども数多く展示されていた。いずれも紅の鮮やかさと文様の可憐さが印象的であった。また紅板締の裂地と、その染色に用いた型板が一緒に展示されているものもあり、理解しやすかった。中には繊細で複雑な文様、花弁のぼかし染、紅と淡紅色の濃淡二色染も見られ、版木の作り方や染色方法に様々な工夫がされていた。

本展示を通して、道具作りから染色に至る紅板締の全工程には、熟練を要する高度な技術と優れたデザイン力が駆使されていたことを知り、紅板締は現代でも通用する、新たな意匠表現の可能性を秘めた染色技法であると思われた。

現在、生産に従事していた人々も殆ど存命されず、型板や枠もその役目を終えてしまったことは、誠に残念なことである。

参考資料：本展覧会図録及び紅板締に関する野上俊子氏の著述・論文
写真提供：京都文化博物館

2015年度　第16回　服飾文化学会夏期セミナーの報告

今年度の夏期セミナーは、平成27年８月４日（火）～６日（木）の２泊３日の日程で、兵庫県南あわじ市と徳島県徳島市・板野郡藍住町・吉野川市山川町・美馬市脇町・鳴門市にて実施されました。

これは昨年度、大型台風により中止となった企画をほぼ踏襲し、新しい訪問地を加えての催行です。阿波藍染を中心に、淡路人形座さらには最先端の技術による陶板名画の大塚国際美術館見学を加えた研修旅行でした。

連日晴れて猛暑でしたが、全員無事に、予定通りの日程をこなすことができました。

８月４日（火）

新幹線「新神戸駅」改札出口に集合し、貸し切りバスに乗車、南あわじ市に到着。福良港に程近い、淡路人形座を見学しました。最初に「戎舞」の公演があり、漁業の神様とされる戎さまの可笑しみたっぷりの舞いを楽しみました。次いで人形遣いの吉田史興氏による解説がありました。

淡路島はイザナギ・イザナミの２神による日本国の「国生みの地」で、人形浄瑠璃発祥の地です。人形浄瑠璃は元々、この「国生みの神」への奉納芸として発達し、それが江戸時代に郷土芸能となって全国に広まりました。その一派が現在の文楽です。500年もの長い伝統を受け継ぐ淡路島の人形浄瑠璃は、それ故に文楽と少し趣が異なっています。頭がより大きかったり、黒子が顔を出さなかったり、また演者に女性が活躍していたりもします。拝見した衣裳も、歴史ものが多いことから、より豪華・重厚で、違いがあるようです。

次に、「伊達娘恋緋鹿子　火の見櫓の段」を鑑賞しました。雪の夜に、お七が必死で火の見櫓を上り半鐘を打ち鳴らすシーンは圧巻でした。

この後、長年文楽衣裳を研究し、2009年衣裳の本を著された清水久美子先生が、「人形浄瑠璃文楽衣裳－特色と工夫－」をテーマにレクチャーされ、座に集った一同、衣裳の奥深さを学びました。

夕陽が海に落ちる頃、ホテルサンルート徳島に着き、ホテル内バンケットにて懇親会が開催されました。服飾文化学会名誉会員石井とめ子先生のご挨拶に続き、伊藤一郎先生が乾杯のご発声をされ、地元の新鮮な食材を使った料理を楽しみながら歓談しました。お腹も満ちたところで、今回の夏期セミナー実行委員長、荻原延元先生による「大塚国際美術館の見どころ・奥村土牛の名作“鳴門”」が映像で紹介され、一日を締めくくりました。

８月５日（水）

朝食後、前日と同じ貸し切りバスで、藍住町にある「藍の館」を訪問しました。ここは大藍商の旧奥村家屋敷を利用した藍の博物館です。広い敷地には、藍が植えられていて、白やピンクの花をつけていました。館長自ら、阿波藍の効能などを話された後、母屋と寝床と呼ばれる藍加工場を見学しました。中でも和紙人形のミニチュアで再現された、藍栽培から加工、販売までの工程の展示が見事でした。藍染めを体験された参加者もいて、空気に触れると色が変化する藍の不思議な性質に感動していました。

次に向かったのが吉野川市山川町の阿波和紙伝統産業会館です。和紙の伝統を継承する一方、新技術の開発も行っている研究機関です。作業場はガラス張りで、吹き抜けの上部に懸かる橋からも見下ろせるモダンなつくりになっていました。短

「藍の館」で館長とともに

時間でしたが、和紙の製法を学び直しました。

昼食は、美馬市穴吹町の「西岡」という和食料理店で、落ち着いた雰囲気の中、天ぷらの会席膳をいただき、次いで藍の歴史のある脇町を訪れ、「うだつの町並み」を散策しました。「うだつ（卯建つ）」とは、建物の外側に張り出して設けた袖壁のことで、防火壁とはいうものの、家格を象徴する装飾だったようです。藍の豪商だった吉田屋住宅や、レトロな脇町劇場「オデオン座」を探訪したり、阿波踊り竹人形の里「時代屋」の竹細工の実演をのぞいたり。炎天下でしたが、タイムスリップしたような静かな町の風情を味わいました。

この後、再び徳島市に戻り、訪ねたのが長尾織布です。しじら織りというシボのある、清涼感のある綿織物を製造している老舗で、同社の「阿波正藍しじら織り」は、日本の伝統工芸品に指定されています。４時を過ぎていましたが、社長の長尾伊太郎氏が工場を稼働して下さり、しじら織りや阿波藍と化学染料などの丁寧な解説付きで、じっくりと工場見学しました。

その夜は自由行動で、夕食後、お薦めの阿波踊り会館に行かれた方も多く、有名連の阿波踊りに興じて踊りの輪に入るなど、楽しいひと時を過ごされたようです。

８月６日（木）

ホテルをチエックアウトし、前日同様、バスに乗り込み、一路鳴門市を目指しました。観光スポットの大鳴門橋から「渦の道」を歩き、ガラス張りの床から、真下に渦潮を眺めました。この日は小潮でしたが、それでも小さな渦や潮流の激しさを体感することができました。

今回の夏期セミナーで最後のハイライトとなったのが、大塚国際美術館の見学です。ここは知る人ぞ知る、世界初の陶板名画美術館で、至宝の西洋名画が同寸大で1,000点、常設展示されています。その規模は日本最大級で、古代より現代にいたるまでの西洋美術の変遷を知ることができます。必見は、横綱白鵬が結婚式を挙げたというシスティーナ礼拝堂とスクロヴェーニ礼拝堂ですが、見どころがあまりにも広いこともあって、ポイントを絞って回られた方が多かったようです。最初は気になった陶板の継ぎ目も、だんだん意識されなくなり、特殊技術で再現された陶板のすばらしさに感嘆しました。

鳴門の「渦の道」

解散式は、システィーナ礼拝堂前で行い、全員思い思いの方法で帰途につきました。

なお、参加者は学生１名を含む22名でした。

（夏期セミナー担当委員　柳原美紗子）

≪　第16回夏期セミナー　スケジュール　≫　2015. 8 / 4～8 / 6

8月４日（火）	12 :30　新幹線「新神戸駅」2 階改札口付近に集合。
	バスガイドが目印を持って迎えます。貸切バスへ案内して移動。12:40 出発 。
12:40~ 14:30	新神戸駅から明石大橋を利用し淡路島へ。南あわじ市福良甲　到着。
14:45 ~ 17:00	淡路人形座・人形浄瑠璃公演 15:00 の部を鑑賞。淡路人形の衣装や頭など拝見。
	★清水久美子先生に文楽人形の衣装のお話を聞く。
18: 30	ホテルサンルート徳島　到着。ロビー集合（部屋割り・一室一名 全室禁煙）
19 : 00 ~20:30	懇親会（ホテル内バンケットにて）　夕食。
20: 30 ~ 9 : 00	「大塚国際美術館の見どころ・奥村土牛の名作"鳴門"」担当荻原（参加自由）
8月５日（水）	8 : 15　ホテルロビー集合。貸切バスに８ ：30 乗車出発。
9 : 15 ~ 10 : 15	藍の館　　大藍商の旧奥村家屋敷・文献資料などを見学。
11 : 00~ 11 : 40	阿波和紙伝統産業会館を見学。
12 :15 ~ 13:00	昼食　　和食料理・西岡　（美馬市穴吹町）
13:20 ~15:00	脇町（重要伝統的建造物群保存地区を自由散策）
16:00 ~ 16:30	長尾織布合名会社　　「正藍しじら織り」　綿織物製造所見学。
17:15	ホテルサンルート徳島到着（夕食自由）　駅前、市内各処にある。
8月６日（(木)）	8 : 30　ホテルロビー集合。　貸切バスに乗車　8:45 出発。
9 : 15 ~10 : 30	渦の道　遊歩道　架橋上よりガラス越しに眼下の鳴門の渦潮を眺める。
10 : 45 ~13 : 20	大塚国際美術館　世界の名画 1000 余点の西洋名画を特殊技術による
	陶板画で再現。古代より現代にいたるまでの西洋美術の変遷を知る。
	昼食館内（自由）。システィーナ礼拝堂前（Ｂ３）解散式 13 : 20～13::25
13 : 30 ~14 : 00	美術館正面玄関前より貸切バスに乗車。松茂バスターミナルへ直行
14 : 20	徳島空港
14 : 50	ＪＲ徳島駅

会 計 報 告

①服飾文化学会　平成26年度収支決算書（平成26年4月1日～平成27年3月31日）

項目	予算	決算	予算との比較（△減）	備考
収入				
(1)年会費	1,347,000	1,197,000	△ 150,000	H27　6,000×2　、3,000×1 H26　6,000×184　、3,000×9 H25　6,000×7　、3,000×1 H24　3,000×1 H23　3,000×1
(2)入会費	16,000	8,500	△ 7,500	1,000×7、500×3
(3)年間購読料	54,000	51,000	△ 3,000	3,000×17
学会誌				
(4)論文編掲載料	450,000	485,000	35,000	Vol.15　　（掲載料）、 3,000　×7（審査通信費）
(5)作品編掲載料	450,000	341,000	△ 109,000	Vol.7　　（掲載料）、 3,000　×　6　（審査通信費）
その他	0	839	839	利子　839
繰越金	393,409	393,409	0	
収入計　A	2,710,409	2,476,748	△ 233,661	
支出				
(1)経費				
1)総会運営費	150,000	150,000	0	
学会誌				
2)論文編発行費	700,000	570,596	△ 129,404	
3）作品編発行費	700,000	604,702	△ 95,298	
4)事務管理経費	200,000	103,800	△ 96,200	
5)通信費	110,000	75,719	△ 34,281	
6)会報発行費	150,000	148,594	△ 1,406	会報No.28,29
7)事務用品費	60,000	76,522	16,522	
8)会議費	80,000	35,300	△ 44,700	
9)交通費	50,000	23,320	△ 26,680	監査・理事会交通費（実費上限2000円）を含む
10)雑費	10,000	7,798	△ 2,202	大会開催校への手土産,印字サービス料金
(2)事業費				
1)事業費A	60,000	40,742	△ 19,258	研究例会
2)事業費B	160,000	150,670	△ 9,330	論文発表会
(3)広報費	150,000	165,478	15,478	ホームページ作成費を含む
(4)予備費	130,409	5,216	△ 125,193	生活科学系コンソーシアムH26年度会費
支出計　B	2,710,409	2,158,457	△ 551,952	
収支差額　A−B	0	318,291		
次年度繰越金	0	318,291		

②服飾文化学会　平成26年度特別会計収支報告書

項目	収入	支出	残高	備考
前年度繰越金			1,728,126	
大会･総会余剰金	50,627			
夏期セミナー補助金		206,365		
名簿作成費		65,976		
			1,506,412	
項目	収入	支出	残高	
服飾文化基金	1,000,000			H21年度繰り入れ
	1,000,000		2,000,000	H22年度繰り入れ

③服飾文化学会　平成27年度収支予算（平成27年4月1日～平成28年3月31日）

項目	予算額	前年度	前年度との比較（△減）	備考
収入				
(1)年会費	1,311,000	1,347,000	△ 36,000	
(2)入会費	10,000	16,000	△ 6,000	
(3)年間購読料	54,000	54,000	0	
学会誌				
(4)論文編掲載料	450,000	450,000	0	
(5)作品編掲載料	400,000	450,000	△ 50,000	
その他	0	0	0	
繰越金	318,291	393,409	△ 75,118	
財政調整積立金の取	236,709	0	236,709	
収入計	2,780,000	2,710,409		
支出				
(1)経費				
1)総会運営費	150,000	150,000	0	
学会誌			0	
2)論文編発行費	650,000	700,000	△ 50,000	カラー写真補助5万円を含む
3）作品編発行費	700,000	700,000	0	大会発表時の記録7万円を含む 英文ネイティブチェック5万円を含む
4)事務管理経費	200,000	200,000	0	
5)通信費	110,000	110,000	0	
6)会報発行費	150,000	150,000	0	
7)事務用品費	70,000	60,000	10,000	
8)会議費	70,000	80,000	△ 10,000	
9)交通費	50,000	50,000	0	監査・理事会交通費（実費上限2,000円）を含む
10)雑費	10,000	10,000	0	
(2)事業費			0	
1)事業費A	60,000	60,000	0	研究例会
2)事業費B	160,000	160,000	0	論文発表会
3)事業費C	40,000	0	40,000	選挙
4)事業費D	200,000	0	200,000	名簿作成費
(3)広報費	160,000	150,000	10,000	ホームページ作成費を含む
支出計	2,780,000	2,580,000		
収支差額	0	130,409		
予備費	0	130,409		

＊＊＊＊＊事務局より＊＊＊＊＊

●新入会員

（2015年２月以降、敬称略　申し込み順）

正会員

森　淳子（杉野服飾大学）
高木　幸子（文化学園大学）
門屋　　博（相模女子大学）
大塚絵美子（共立女子大学）
上松　麻樹（昭和学院短期大学）
川又　勝子（東北生活文化大学）
近藤　静香（文化学園大学）
角谷　彩子（文化学園大学）
井之上昌恵（文化学園大学）

学生会員

上野　邦子（文化学園大学大学院）
管野　絢子（文化学園大学大学院）
長谷部寿女士（筑波大学大学院）
桜井　あや（共立女子大学大学院）
丸塚花奈子（共立女子大学大学院）
根津夏菜子（東京家政大学大学院）

＊＊＊＊＊研究例会のお知らせ＊＊＊＊＊

平成27年11月28日（土）13：30～16：10　於：共立女子大学
皆様ふるってご参加ください。
「礼装規範の形成と近代日本」
小山直子氏　（宇都宮大学・非）
「グアテマラ高地マヤ先住民女性の衣文化に関する動態的研究」
本谷裕子氏　（慶應義塾大学）

◇◇◇◇◇展覧会のお知らせ◇◇◇◇◇

■「特別展 きもの モダニズム」
平成27年９月26日（土）－12月６日（日）
監　　修：長崎　巌
開催場所：泉屋博古館分館（六本木）

■「こどもとファッション　―小さな人たちへのまなざしの歴史」
会　　期：2016年２月27日（土）－４月11日（月）
会　　場：島根県立石見美術館
特別講演：ヨーロッパにおけるこども服の歴史
日　　時：2016年２月27日（土）講師　能澤慧子

■「ファッション史の愉しみ　－石山彰ブックコレクションより」
会　　場：世田谷美術館
会　　期：2016年２月13日（土）－４月10日（日）
休　　館：月曜日（祝休日の場合はその翌日）
特別講演：未定
開催日時：2016年２月13日（土）講師　能澤慧子

■「嫁ぐ日・晴れの日・華やぐ日　－和装・洋装の花嫁－」
会　　場：東京家政大学博物館
会　　期：10月15日（木）－11月19日（木）
【展示内容】江戸時代後期から昭和時代までの和装の婚礼衣装を中心に、19世紀後半ヨーロッパのウェディング・ドレスやファッション・ブックなど約60点。

＊＊＊＊＊近著紹介＊＊＊＊＊

☆内村理奈編著『ファッションビジネスの文化論』北樹出版、2014年、共著、田中淑江、沢尾絵、新實五穂、朝倉三枝

☆増田美子編著『葬送儀礼と装いの比較文化史：装いの白と黒をめぐって』東京堂出版、2015年、共著、内村理奈

会報　No.30：2015（平成27）年９月30日発行
編集発行人：服 飾 文 化 学 会
事務局：173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1
東京家政大学服飾史研究室
TEL：03-3961-8273
E-mail：nohzawa@tokyo-kasei.ac.jp
URL：http：//www..fukusyoku-bunka-gakkai.jp